

ケクチの人々の新しい生活のために！

農業普及事業のこれからの展開

この文章は日本ラテンアメリカ協力ネットワーク
で青西 鏡開発と権利のための行動センター代表
が活動していた際に『ユーステラー ゼンリさ』に投
稿した文章です。

グアテマラのマヤ系先住民の「グループであ
るケクチは、グアテマラ東部のアルタ・ペラパス
などを中心に生活してきました。

ところが、「コヒー」農園や、放牧地など大農
園が広がっていく中で、彼らの土地は奪われ
ていったのです。土地を奪われるとケクチの人
々は新しい土地を求め、移動し続けてしまし
た。人々は新しい土地を探し、森を開き、焼
畑耕作を行ってきたのです。ですが、大農園
主は、彼らが住んでいることなどお構いなく、
土地の囲い込みを続けています。しかし、もう
ケクチの人々が動いていく土地はありません。

「今、土地の登記を進めなければ、現在彼
らが生きている土地、彼らが開いてきた土地

すら奪われかねない」

そこで、「ヨック」とともに土地運動を進め、
自分たちが生活してきた土地を自分たちの
ものにするともに、その土地で新しい農業
を行っていくと考えています。

これからの活動地域

イサバル県・リビンググストン

グアテマラ東部・イサバル湖から大西洋にそ
そぎこむリオ・テュルセ(甘い川)その兩岸の地
域が、今回視察に行き、今後活動を行ってい
く地域です。

どこも小舟を借りて、そこから歩かないよ
行き来できない、そんな所ばかりです。そして
どこで聞いても、政府機関の支援などもほと
んどない、農業の普及サービスなど存在した
こともない地域です。

訪問記・イサバルの人々の生活

リビンググストンから川を上流にさかのぼっ
ていっても、どこに村があるのか、ちっとも想

像がつきません。両脇は切り立った崖で、この
天然の要害に守られてか、木が生い茂り、水
鳥たちが羽を休めています。エコツアーにはい
いかな、そんな感じで川を上ること約四〇
分。小さな一軒の家が川岸にへばりついていま
す。どうやらそこが登り口らしい。

便乗させてもらった砂利運搬用の小舟を降
りと、鬱蒼とした森の中に続いていきます。
足下には大きな石がゴロゴロと、きつと森を
拓いてしまったらこんな石しか残らないのだ
ろうな・・・でもそれにしても畑を開き、村を
作るにはいくら何でもひどすぎる、などと思
いながら。半時間ほど登り続けると、バナナな
ども目にはいるようになり、遠くから鶏の声
なども聞こえてきます。

どうやら村に入ったよう。椰子の葉を編ん
で作った屋根の家が点在している。集会が始
まるまで一軒の家で「コヒー」をこちそうにな
る。部屋の中は本当にシンプルで、ハンモック
がいくつかがぶら下がり、台の上にしつらえられ
た竈があるぐらい。そこで、朝にリビンググスト
ンで買ったパン・デ・ヨを食べながら一休み。

そのうち村人たちが集まってきたので、今は休暇中の学校の前でミーティングを始める。

それぞれの自己紹介のあとに、突然「自分たちは船が欲しい」と始められてしまったので、ちよつと身構える。まあ村に行くと援助の話をもちかけられることはたびたびあるので、改めて同行しているコックのこの地域の担当者に通訳をしてもらいながら今回の訪問の意図を説明する。ここではケクチができないと話にならない。特にこの村が最初の訪問地だったので、あれこれ地域の概要も含めて聞かせてもらう。女性たちは乾期になると近くにみず場がないのでそれが問題だと語っていた。男性と女性ではやはりいいことは異なるようだ。

さて、話を聞いているうちに。去年もコックのOとRが同じような調査をして、そのあとなしのつづてじゃないか…それはどうなっているのだ！とまたつつかれる。そんな話は聞いていないので、こちらとしては困ってしまったのだが、この先の他の村でもNGOみたいのやらが調査をしたあげくに、その後なにもないとい

う文句を何度も聞かされることとなる。現場の状況を押さえないことにはどうにもならないし、かといって、その人がすぐ受益者となるという保証もなく…それにしても、交通手段にしても、水にしてもこの地域では重要な問題だと思いつつ、こんな状況で本当に今回の普及事業は役にたつのだろうか…心配を抱えつつ次の村へと移動する。

徒歩で一時間ほど。畑と森の混在する地域を抜けると、柵に囲まれた牧草地が現れ、牛が草をはんでいる。こんな不便な地域でもやはり大農園は広がっている。川縁に降りて、一休みしてから再び小舟で小さな川を対岸へ渡る。今回同行してくれているエルメリンドの住むトゥビヤル村だ。トゥビヤルはこの地域の鳥でダンスをするのに、木の間をきれいにするのでという。自分たちも同じようにこの土地を開いたのだという。

川縁のこの村には何本もヨヤシがあり、さっそくマチエーテでヨを割ってちこそつしてくる。豚たちもヨのかけらに群がりながら歓迎してくれる、そんなもんで食べるのか。

・犬はおぼれに預かろうとするものの、飼い主に追い払われる。お金になる豚の方が大事なのだ。

ここで、トウモロコシの他に、低地でお米を作ったり、豚を飼ったりしているが豚は金にもなるが、とにかく食べさせるのが大変だ、という。餌はトウモロコシだという。草木の生い茂るこの土地をみていると、豚の餌ぐらいいくらでもあるだろうに、と思うのだが、豚の主食もトウモロコシらしい。

この人たちは、数年前に現れた「地主」とやらに土地を奪われるところだったが、どうにか一部の土地を確保したものの、遠くはないところではあるが移住を迫られているのだという。

さて、ここから次の村へ移動するのに、また船に乗ることになる。モーターボートを借りるのだろうと思いきや、川縁の掘り抜きで作ったカヌーを引っ張り出してきて、これで行くのだという。川幅はそれほど広くないし、水は冷たくはないからひっくりかってもおぼれることは無いだろうとは思いつつ、あわてて、カ

メラをビニール袋にしまっ。

エルメンドが櫂を持ってきてこぎ出すこととなる。船外機をつけたボートが通り過ぎるたびに、この心細いカヌーは波に揺られることとなり、何度も後悔するのだった。それにしても、トウモロコシの民であるケクチとこのカヌーの技はどこで結びついたのだろう・・・不思議だ。

川をさかのぼること長い長い1時間ぐらいか・・・川縁に船着き場があり、そこからまた上っていく。しばらく歩き続けると、石油のパイプラインに出くわした。キチエ県の北部からぶつとつながっているらしい、パイプ沿いに少し歩くと、Creek Maya とい今日最後の村に到着。コックの以前の地域担当であったラミロと始めたという、若者グループの商店の前で一休み。それから小学校の方へ移動。

ここ近くでは、大昔、そしてきつと今も形の変わらぬ石の粉ひきがいくつも見つかるらしく、そんなところからCreek Mayaと名付けたらしい。

さて、小学校へ向かうと、平坦地にサッカー

場が現れる。不慣れた村でも、とにかく平らな所があると、まずサッカー場が作られてしまっ。これはもったいないことでも何でもないらしい。その脇の小学校の校庭みたいなものでもあるし、まあいいのだろう。それで、しばらく、休憩。夕食のあとミーティング。

翌朝、学校の近くの家で食事をこ馳走になる。小麦を使ったトルティージャ。フカフカのパンみたいである。時々こつこつを食べているのか、ちょっと聞き逃してしまった。この村から再びパイプライン沿いに歩き出し、最後に靴を脱いで川を渡ると、タメハ(Tameja)の村に着く。10時ぐらからミーティングを行う。トウモロコシも収穫が足りないと言わなくてはならない、バナバも動物に根から掘り起こされてしまっ。トウガラシも育つけど、実が落ちてしまっ・・・と悲観的な話が多い。トウガラシなど地域の伝統的な品種だといっが、以前はとれていたものもとれなくなったといっ。

村人たちは、以前はちゃんと播種の前とかに儀礼を行っていたのにやらなくなったせいだ、近くに牛が入れられて放牧地が開かれ

て土地が狭くなっただけだ、毎年のように耕作するようになった、以前はマチエテだけで除草していたが除草剤を使うようになった、といっろんな説を教えてください。

最後の村、プランケランデ・タティン(Plan Grande Tatin)に着く頃には、スポンは泥だらけ、靴はぐちょぐちょで、小学校の前で一休みしながら、靴を少し乾かす。ミーティングは夜になりそつだ。

夜になり、小学校の教室でミーティングが始まる。小学校に小さな太陽電池パネルが備え付けてあるよう、そのおかげで蛍光灯の明かりの下でのミーティング。しばらく農業の状況を聞いたあとに、再び突き上げを食らう。コックも調査ばかりで、何もしない、「詐欺師』の同類なのか!？」

私はこつこつして来ている、といっことは物事は遅いかもしれないけど、進んでいること。コックにしても、レコムにしても、独自の資金で動

けるのではなく、こうした調査のあとに申請をしてその結果を待ち、というプロセスがあること。村の人も、ヨックの人間に対してもNGOに対してでも、その結果がどうなったか回答を求めればいいじゃないかと、あれこれ話をする。

それから、援助で来ている肥料の話も話題となった。どこかのNGOがきつとミツチ台風の後の緊急『救援』の一環なのだろうが、鶏糞ペースの有機肥料を援助したのだが、実は船着き場の船小屋に置かれたままになっている。肥料をくれるのもいいが、誰も使い方を教えてくれない、そんな声が出た。それにもっと臭わない肥料もあるだろうに・・・この地域の農民は自分たちのトゥモロウにはほとんど肥料を使わない。そうした農民に肥料だけ届けて、いつどうやって使うか誰も教えてくれない、それで肥料袋が積み上がったままになっている。それでもきつと化成肥料なら、どこかで使ったことのある農民もいるのだろう。しかしNGOの都合で、化成肥料をばらまくとというのはできなくて、鶏糞堆肥を援助したのだろうけど、それで余計に人々は戸惑っているようにある。

他にも、この地域で動いている環境団体は、この土地をその組織の名義で登記を進めようとしている、メキシコに土地を売り渡そうとしている？、その上、カオバの植林を進めようとするから、近づかないことにした、と不信の目で見られている。政府の社会投資基金(FIS)はこの村にトイレの設置の援助をしてくれたが、乾式の堆肥トイレというのにさせられてしまった。でも住民はそんなのは使っていない：そんな話を聞かされた。援助機関が動いていれば、動いているで、それぞれの組織の思惑で、「よさそうな」ことをしては、空回りをしているらしい。

変わっていくマヤの農民たちを支援してください

ケクチの農民たちの新しい道を

新しい方向を探るケクチ農民を

新しい道を探るケクチの人々を支援してく

ださい！